

実践での教材（本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合）3-2
①↑

- 幼稚園、保育園から小学校へ入学してからのギャップ、それに対する感想
親の送り迎え→分団での登校、自分で力で登校・下校（晴れの日も、雨の日も。）
傘をさす、長靴・雨具のしまい方→全部自分でやる。
荷物→ランドセルは教科書が全部入っており、重たい。

感想

「歩くのがたいへんだった。」「たのしかったよ。」「ランドセルが重い、背中がいたかつた」「散歩みたいでたのしい。」

⇒これらの感想を基に朝の会「みんなのお手紙の時間」で交流。

さらに発展させて

- 「こういうことがあったよ」という関わりを児童と教師の間だけにせず、子ども同士の交流の時間（質問・感想・意見）も設定する。
Ex) 「それはどこで見つけたの。」「そんなことがあったなんて、ビックリ。」
- 周りに目が行くようになる。新たな発見を見つける力がつく。
- 自分が体験したことを上手く伝えようとする意欲が育つ・力がつく。

幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか

小学校への道のり体験

小学校への道のりを実際に体験することによって、いきなり自分の力だけで登校、という不安を和らげることが出来る。自分の力でやり遂げることによって「出来る！」という自信を得る・小学校生活に対する安心感を持つことをねらうことができる。
また、実際に体験してどうだったかの感想を伝えあい、子ども同士で交流する。

Ex) 「小学生は大変だなあ。」「お母さんはついてこないの。」「ぼくは遠くまで行けて楽しかった。」「知らない道だった。」「たくさん歩いて疲れた。毎朝こうなのかなあ。」

参考文献

行田稔彦・渡辺恵津子・田村真広・加藤聰一（2018）『希望をつむぐ教育』

実践での教材（本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合）②
入学すると保育園まで車や親の力を借りていたことが小学校まで自分の足で歩いたり、身の回りのことを自分でやらなければいけなくなったりすることが多くなる。毎日の生活で起こったことや自然からの発見を「みんなのお手紙の時間」として設け、先生への報告や生徒同士の共有を行っている。長靴を下駄箱に入れることも簡単ではないが、友達と協力したり、自分の力でやったりしっかりとやろうと取り組んでいる。児童は自分でしようと頑張るが先生も生徒が1人でできるように援助していく必要があると考える。基本的な生活を中心としていた幼稚園から小学校でさらに学びを深めていくのだが幼児教育と小学校以上の教育で連続性にはいくつかの資質・能力が必要である。生きて働く知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力・人間性の涵養が必要である。また、幼児教育で学んだことがその後の生活にも活かされていくので幼児期の学びは重要とされている。そのために一人の児童が、何ができるようになって、何をどのように学んでいくかを大切にしなければならない。

幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか

保育園から散歩をして実際に自分で歩くことの大変さを知りつつ自然と触れ合いながら歩くことで、車で移動しないことで発見できしたことや自然の中で見つけたことを共有する時間を作る。また、その散歩がてらに公園等に寄って、外での遊びを楽しむ時間を作る。園に帰ってから、先生は「どうだった?」と聞き、子ども達はそれぞれ感じたことを伝えようと言話す。

この活動によって、外でしか体験できない自然との触れ合いや、自分の力で歩くことの大変さを知り、また友達がいることで自分にどんな助けがあったかなど様々なエピソードが生まれると思う。そして、それらを自分の言葉にして人に伝えようすることで語彙力が伸びたり、言葉の練習になったり言語力の発達につながると考える。

参考文献

希望をつむぐ教育

- 実践での教材（本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合） ③
1. 「初めて学校まで歩いてきてどんなことを思ったのか」という問い合わせに対して、子どもから、「歩くのが大変だった」や「ランドセルが重たかった」など、マイナスな声が多いと感じた。けれど、そんな子どもの声に教師は耳を傾けて思いを受け止め、それを一つの発見とした。
 2. 保護者と心を通わせるために、学校からは「学級物語」というものに子どものつぶやきや授業での子どもたちの様子や思いなどを綴り伝え、保護者からは連絡帳などで感想を書いて下さることもお願いし、学校と保護者とで情報を共有し合う。保護者が子どもの学校での様子を知ることで、家庭で子どもとのコミュニケーションも増えて良いと思う。
 3. 二年生はこれから学校生活が楽しくなるように、一年生のために楽しい時間を作る。他学年との交流も大切。学校探検では、ただ見学するだけでなく、「どんな部屋があったか」や「もっと知りたいこと」をペアで話し合わせる。教師はそこで出た意見や疑問を大切にし、実際に見たり、話を聞いたりして確かめ、新たな発見や気づきに変える。
 4. 一年生の眼の輝きを教育の希望として最大限に尊重し、そこから安心と信頼を得て、子どもたちをつなぐのが、教師の役割。

幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか

○子どものつぶやきや園での様子を降園時に保護者に話、家庭での子どもの様子を聞き出したり、「学級物語」のようなものをおたよりの中でコーナー化させるなどして情報を共有する。

○異年齢との交流を増やし、さまざまな刺激を受けたり、良好な交友関係を築く、人の違いを受け入れる力を養う。

○保護者にも子どもたちからも信頼を得ることがコミュニケーションをとる上でも重要。

常に子どもたちと一緒に成長していく大きな心を持つことも大切。

参考文献

- ・希望をつむぐ教育 発行：2018年8月1日

実践での教材（本のまとめ+教材研究を加える・調べたこと+もっと発展した場合）

④

・1年生は学校に来るのにもいままではお母さんやお父さんに車で送ってもらっていたが、小学校は自分で歩いて通学する。入学式の時に「今日初めて学校まで歩いてきてどんなこと思いましたか」と質問をしてみると「歩くの大変だった。」「ランドセルが重かった。」など子どもたちにしかわからない貴重な声を聞くことができる。このことをもとにして保護者へのお願いやお知らせを「学級通信」子どもたちのつぶやきや、授業でのこどもたちの様子や思いなどを日々のドラマを綴って届けたいという思いから「学級物語」を作ったという。

・子どもたちの中でも校長室は学校探検の時しか入らないという人も多いと思う。校長室には学校の歴史の本や保育園から来た資料などがおいてある。校長室の金庫は「百万円以上する」というと驚きの声が上がった。

幼・保でやるとすればどのような題材になるか、なにがねらえるか

・入園してきたときに保育園や幼稚園探検をして、お兄さん・お姉さんと一緒に遊ぶ会を開く。それによって園ではこんな楽しいことをしているんだと感じ、楽しく通えるようになる。

参考文献